

# 小悪魔の にきき。

九曜 Kuyō

Sono Onna Koakumani Tsuki

# 2

## 1

マナーモードにしておいた携帯電話が、テーブルの上で低い振動音を響かせた。

テキストとノートを広げて勉強していた僕は、それを素早く手に取る。そのままサブディスプレイを見てみれば、そこにはすっかりお馴染みとなった榎坂涼の名前があった。

さて、取るべきか取らざるべきか――と考えてみるが、もちろん、そんなものはポーズである。しかも、自分に対しての。自分のことを最もよく知る自分だからこそ、迂闊に隙は見せられない。人間とは自分に甘い生きものだ。彼女がいらないからといって榎坂涼に対するスタンスを緩めれば、そこから一気に瓦解するだろう。

僕は端末を持って席から立ち上がった。

自動ドアを通過して外へ。六月を目の前にした五月下旬の午後の陽射しは思った以上に眩しく、僕の目に無遠慮に飛び込んできた。屋内も決して暗くはなかったのだが、やはり人工の照明と太陽の光は違う。蛍光灯は人にやさしく作られているが、太陽は苛烈だ。僕はそれを実感しつつ太陽の背を向け、電話に出た。

「もしもし」

装画 vient  
装幀 アンシークデザイン

『今日も月がきれいね』

「……」

おい、太陽もつとがんばれよ。ぜんぜん目に入っていないやつがいるぞ。

思わず通話を切りたくなかったが、ぐっと堪える。それは自ら負けを認めるようなものだ。戦わずして負けることは許されない。

「……月はまだ出てないと思うが？」

しかし、出てきた言葉は何のひねりもない上、悪手もいいところだった。

『そう？　じゃあ、きつと天邪鬼には見えない月なのね』

「何か用があったんじゃないのか？」

槇坂先輩の言葉にややかぶせ気味に発音する僕。結局、強引に話を変えてしまった。電話の向こうで彼女は、勝ったとほくそ笑んでいるに違いない。

『今日、帰りにつき合ってほしいところがあるの。次の授業が終わったら、掲示板の前で待っててくれないかしら？』

「生憎だけど、今日は午後の二時間ぶち抜き授業が休講でね。僕はもうとくに学校にいないんだ」

つき合えなくて実に残念だよ——と、つけ加えておく。……そういうことはもっと早く言ってお

いてほしいものだ。昼休みにでも言ってくれたら、こっちじゃなくて図書室で勉強していたのに。

『今どこなの？』

槇坂先輩は少しばかり慌てたように聞いてきた。

「ラーニング・コモンズで勉強中」

『ラーニング・コモンズ……？』

一字一字確かめるようにその単語をリピートする。

『初めて聞くわ。どこにあるの？』

「さて、どこだろうね。……ああ、ここもいちおう明慧の敷地内ではあるのか。ま、テキストなどところで引き上げるつもりだし、これから授業がある槇坂先輩に言っても意味はないんじゃないかな。それじゃ、これで」

『あ、ちょっと藤間く——』

最後に何か言いかけていたようだが、問答無用で電話を切った。これで先ほどの借りは返せたか。後で面倒なことになりそうな気がしないでもないが。

僕は携帯電話を折りたたむと、カードをカードリーダーにかざし、開いた自動ドアからラーニング・コモンズの中へと這入った。席に戻り、勉強を再開する。

そうして約三十分ほど後のことだった。

「ここがそのラーニング・コモンズ？」

聞き慣れた涼やかな声。

僕はため息を吐きつつ、静かにシャーペンを置いた。何となくこうなることを予想、もしくは、期待していたような気がしなくもない。少なくとも、遅かれ早かれ辿り着くだろうとは思っていた。顔を上げればそこに立っていたのは、黒髪ロングのオトナ美人。我が明慧学院大学附属高校では知らないものはいないであろう有名人だ。平和と退屈と本を愛する一介の男子高校生である僕には不釣り合いも甚だしいのだが、紆余曲折を経て、現在、彼女と親しい間柄にあった。

「……なぜあなたがここにいるのか聞かせてもらえないだろうか。授業は？」

僕は軽い頭痛を感じつつ尋ねた。

確かにいつかはこうなると思っていた。だが、それにしても早すぎる。授業があるはずなのだ。

「あの後、急にわたしのほうも休講になったの。驚いたわ」

「……」

そりゃあびつくりだ。

「もうひとつ。どうやってここに入った？」

ここに入るにはICカードを入り口のカードリーダーに読み取らせなくてはいけない仕組みになっている。ラーニング・コモンズの存在を知らなかった槇坂先輩がそれを持っているとは思えなかった。

「丁度ここに入っていく人がいたから、中に友達がいるので一緒に入らせてくださいって頼んだの」

「……なるほどね」

彼女のことだ、きっと男子学生を捕まえたのだろう。槇坂涼に頼みごとをされて断れるやつなどそうそういない。

その件は兎も角として、休講云々の嘘を暴くことはとても簡単だ。今から連絡掲示板を見に行くか、携帯電話で明慧大附属のサイトを開いて生徒向け連絡事項のページを見ればいい。しかし、そうやって証拠突きつけたところで、槇坂涼はあっさり嘘を認めるだけ。たぶん今のこの状況が変わることはないだろう。

なら、僕も頭を切り替えよう。

「よくここまで辿り着けたな」

電話では聞いたこともないような口振りだったのに。

「きつとわたしには藤間くんの居場所がわかるセンサーがついているのね」

そんな冗談を言って彼女は微笑む。そうしてからテーブルをはさんで僕の前に座った。

「あなたが言うラーニング・コモンズという場所がどんなところか気になって調べてみたの。大学の施設だったのね」

そう。ここは僕らが通う高校から道一本隔てたところにある明慧学院大学の中だった。もっと正確に言うなら、学術情報館、つまりは大学図書館の管轄下の施設である。

「こっちにきたのは初めてだわ」

「てっきりこの学生とつき合ってたときに、よくきていたんだと思ってたよ」

確か槇坂涼にまつわる数々の噂の中にそんなのもあったはずだ。

「前にも言ったと思うけど、その手の噂はぜんぶ嘘よ」

「ああ、そうだった。ついでに今もフリーなんだっけ？」

瞬間、彼女はわずかにむっとした表情を見せたが、それはすぐに挑戦的なものへと変わった。

「ええ、でも、好きな男の子はちゃんとして、今がんばってアプローチしている最中なの。反応はあまりよくないけど」

「そいつはひどいやつだな。槇坂先輩ほどの人を放っておくなんて」

僕は白々しく応じる。

「本当ね。一度は好きだって言ってくれたのに」

「もしかしたら今ごろ、そう言ったことを後悔してるかもしれないな」

少なくともここに後悔している人間がひとりいるのは間違いない。……まったく。同じネタでこんなにも引つ張られるとは。不用意なことは言うものじゃないな。

「ちよっと素直じゃないだけよ。口ではそんなことを言ってるけど、本当はわたしのことが好きで仕方ないんだから」

「……あなたの一方的な妄想じゃないことを祈るよ」

真っ直ぐこちらを見つめてくる彼女を前に、僕はそれだけを絞り出すのがやっとだった。テーブルの上に置いていたペットボトルのお茶に口をつけ、暗にこの話題はこれで終わりだと告げる。

「それより——ここはどういうところなの？」

ラーニング・コモンズ内を見回しながら、槇坂先輩が問うてくる。僕もつられて辺りに目をやれば、そこにいる多くの学生がこちらを見ていた。制服姿の附属高校の生徒が珍しいものもあるだろうが、やはり槇坂涼の美貌によるところが大きいだろう。

僕はペットボトルを彼女からいちばん遠いところに置いてから答える。

「ここは単にテキストやノートを使った勉強だけでなく、議論や討論も含めた広い意味での学習の場所なんだ。静寂を美德とする図書館の中とは違って、ここはディスカッションやグループ学習などにも使える」

「それがラーニング・コモンズ？」

「本来は施設の名称ではなく、場の提供から図書館員による学習のサポートまでを含めたサービスのことだけだね」

ここに置かれているテーブルやイスは、すべてキャスターがついていて、簡単に動かせるようになっている。人数や目的に合わせて好きなだけ集めて使えるようにだ。ホワイトボードやパーティションもそう。利用者が自由に動かしてレイアウトを変えられるようになっていて。

改めて中を見回せば、今もあちこちで学生がテーブルを囲んで何やら話し合いをし、司会役がホワイトボードにマーカーを走らせている。プレゼンの練習をしているグループもあった。もちろん、僕のようにひとりで勉強しているものもある。

「ずいぶんとリラックスした空間ね」

「狙いはまさにそこだろうね。堅苦しい従来の図書館のイメージを払拭するために、一九九〇年代、

欧米の大学図書館からラーニング・コモンズはじまったんだ」

そのため空間の色彩もバステルカラーを使って、ぐっと明るくなっている。

「日本の大学もそれに遅れること十数年、最近になってようやく増えてきたところだ」

「わたしもたまにきてみようかしら」

「ぜひそうするといいい。附属の生徒なら学生とほとんど同じように使わせてもらえるから」

最近では私立の大学でも地域貢献のため、有料だったり無料だったりするが、図書館を周辺住民に開放しているところも多い。が、明慧学院大学はその流れには乗らず、相変わらず従来通り閉鎖的だ。ただし、附属の生徒は学内者扱いで利用できる。

楨坂先輩に限ったことじゃないが、高校生の身でありながらせっかく大学図書館を使わせてもらえるのだから、もっと積極的に利用するべきだろう。

「藤間くんはよくここで勉強を？」

「まあね」

僕はラーニング・コモンズという場所が好きだった。

ここは図書館に付属する施設でありながら活気がある。くるたびにテーブルの位置や向きが変わっているのは、よく使われている証拠だろう。たまにホワイトボードに消し忘れが残っていて、証明問題の解答や何かの打ち合わせの名残があって面白い。なぜかやたらと上手い絵が描いてあることもある。こんな場所では勉強に不向きに思えるが、僕がこの場所を気に入っているせい、いつも意外と捗っている。休憩がてら周りの様子に目を向け、話し声に耳を傾けるのも楽しみのひとつだ。

つだ。

「ずいぶんと熱心ね。やつぱりいい大学に入るため？」

「いい大学」よりは「行きたい大学」だと思ってるよ。月並みだけどね」

大学なんてある程度のレベルまでいけば、どこも似たようなものだ。その気さえあればいくらでも学べるし、遊びとバイトに勤しんでも最低限の単位さえ取れば卒業させてもらえる。ならば、偏差値なんていう数字でランク付けされた「いい大学」よりは、自分の行きたい大学を目指すべきだろう。

「あら、お目当ての先輩を追いかけて明慧にきた人が、どの口でそんなことを言うのかしら？」

「……いちおう言うておくけど、図書室が充実していると大学図書館を使わせてもらえるという理由もあったんだ。あと、単位制にも興味があった」

決して嘘ではないのだが、どうにも今つけ足した感が否めないな。

「ところで大学はどこに行くつもりなの？」

「……気が向いたらおしえるよ」

僕は楨坂先輩の問いに、あえて回答を避けた。

実を言うと、僕の行きたい大学は日本にはない。僕がやりたいことを存分にやるためにはアメリカが最適だし、そのためにはあつちの大学で最低でも修士課程まで修めなくてはいけない。だから、たぶん僕は高校を卒業したらアメリカに行く。

「早くおしえてくれないと困るわ。わたし、先に行って待ってるつもりだもの」

「……」

だからだ。そんなことを言うから、僕もその話をするのに気がひけてしまうのだ。

「それにしても、藤間くんは本当に図書館が好きね」

「そこは否定しない」

話題が変わったことにほっとしながら、僕は答える。

「実は今年の夏休みにでもヨーロッパの図書館を回ってこようかと思ってる」

「そうなの？ ヨーロッパならやっぱりイギリス？」

「それとフランス。あとは北欧だろうね」

北欧は図書館行政においてまぎれもなく先進国だ。その頂点には、それぞれの特徴ある外国研究を互いに利用し合おうという趣旨に基づいたスカンディア計画がある。そのスカンディア計画のもと、北欧四国にまたがる図書館ネットワークが構築され、特色ある図書館コレクションを相互に利用できる体制が整っている。

特にデンマークとスウェーデンは、国内の公共図書館網もしっかりと整備されている。これは教育を重視してきた伝統と、戦後、福祉国家として再出発したが故だろう。

そんな話を興味深そうに聞いていた槇坂先輩は言う。

「楽しそう。日程が決まったらおしえて」

「うん？」

「わたしも都合をつけるから」

「待て」

何やら聞き捨てならない台詞を聞いた気がする。

「まさか一緒に行くつもりか？」

「ええ」

彼女は迷いのない様子でうなずいた。

「冗談はよせ。男とふたりで旅行なんて正気か？」

「もちろん正気よ。心配しないで。夏までまだ時間があるもの」

槇坂先輩は天使のように魅力的な笑みで、悪魔のように魅惑的な言葉を紡ぐ。

「きっとそのころには、旅行くらい何でもない関係になってるわ」

「……」

僕は思わず頭を抱える。

彼女の思惑に抵抗するには、もういつそのこと旅行自体を取りやめるのが早いかもしれない。

## 2

翌日の榎坂涼は、何だか浮かれているように見えた。

僕と彼女、共通の授業の前の休み時間。僕が座っているのは教室後方の階段状になった席で、榎坂先輩は前方の教卓正面からやや左にずれた位置。お互いいつもの席。だから、見えるのは後ろ姿のみ。しかも、例の如く彼女を慕う生徒に囲まれているので、その隙間にちらちらと見える程度。それだけの視覚情報しかないが、僕の目には彼女が浮かれているように見えた。

話すときの身振り手振り。

隣にいる生徒に顔を向けたときの微笑みの横顔。

普段とあまり変わらないように見えて、でも僕は、今日の榎坂先輩は機嫌がいいなと思った。

「なあ、榎坂先輩、なんかはしゃいでないか？」

「そうか？」

何となく隣にいる浮田うきたに聞けば、やつは「んー？」と目を凝らして前方を見つめる。

「今日もいつも通りきれいいじゃないか」

「わかった。お前に聞いた僕がバカだったよ」

いつも榎坂さん榎坂さん言っているこいつが気づかないのだ。つまり、僕の気のせいということなのだろう。

「ええ、ちょっと浮かれてるわよ」

それでもどうにも気になって聞いてみたところ、あっさりとそんな肯定の返事が戻ってきた。

——今は放課後。明慧大の図書館に行つて、昨日交付申請をした榎坂先輩のライブラリーカードを受け取ったその帰りだった。

行くときは大学の正門から入ったが、キャンパス内での図書館の位置からして、帰りは別の門から出て駅を目指すほうが近い。そのため僕たちは、いつもの大きな道路沿いの歩道ではなく、住宅地の間を通る道を歩いて、裏から駅へと向かっていた。

「あまり表には出さないように気をつけてただけど、隠しきれてなかったのね。でも、嬉しいわ。こんな些細ささいな変化に気づいてくれるなんて」

榎坂涼は、今度は気のせいではなく、明らかにしゃいだ様子でそう感激を口にした。

「ずっとわたしのことを見てるからかしら？」

「何かいいことでもあったのか？」

僕はそこには触れず、先を促す。

「ええ、もちろん。……そのあたりはあなたも同じだと思つてただけど？」

「僕も？」

どういう意味かわからず、僕は問い返した。

「だって、わたしには素敵な彼氏ができたし、あなたには素敵な彼女ができた。思わず浮かれてしまうには十分だわ」

「自分で言うかよ」

彼女らしいと言えば彼女らしいが。

槇坂涼は誰もが認める美貌と知性の持ち主だ。そして、それを鼻にかけないだけのひかえめさも持ち合わせている。つまり、優等生。とは言っても、それは僕以外の人前での話であって、僕の前では違う。僕と一緒にいるときの彼女は意外と自信家で、いたずら好きの性格を隠そうともしない。そんな精神性の持ち主でないと『槇坂涼』なんてやってられないのだろう。

「あら、その台詞でいいの？」

「……前言撤回。彼女なんかできた覚えはないね」

僕が言い直すと、槇坂先輩がくすくすと笑い出す。

「ずいぶんと苦しいわね」

「なに、守るべきものを守るためには、多少不恰好になっても気にはしないさ」

「そう。どこまでがんばれるか、期待してるわ」

非常にばつの悪い思いを抱きつつ歩を進める。

「ほかにあるのよ、理由」

「……まだ何か？」

どうにもろくでもないことのような気がしてならない。知らず自分の声に警戒の色が含まれる。

「だって、夏には藤間くんとの旅行が待ってるんだもの。楽しみだわ」

「……」

ほら見ろ。

「楽しみにしているところ悪いが、僕にそのつもりはないよ」

「そうなの？ どうして？」

そう問う槇坂先輩の声には驚きも落胆も怒りもなく、不思議そうな、そして、どこか期待するような響きがあった。彼女のことで、僕が断るためにどんな理由を持ち出してくるのか楽しみなのだろう。

「当たり前だろ。高校生の男女がふたりだけで旅行になんて行くものじゃない。何かあったらどうする」

「何かって？」

「何か、だよ。わかるだろ」

わからないはずがない。槇坂涼は清楚可憐だが、年相応の知識と興味をもっている。もしかするとその大人びた容姿に相応しく、決定的な一歩を踏み込む勇氣ももっているかもしれない。周りは彼女が清廉で純真無垢だと思っていたがらう。だけど、それは幻想に過ぎない。少なくとも僕はそうだと知っている。

「間違いと言い換えてもいい」  
 「わたしとあなたなら、それは間違いではなく必然だわ」  
 「かもね」

男と女がいて互いのことを想っているのなら、その流れは自然なことだ。

「だけど、大人はそうは思わない」

まだ高校生なのに。知識もないのに興味だけで大人の真似をする。最近の子どもは自分を大事にしない——。そうやって呆れられ、嘆かれることだろう。当事者がどんな気持ちかなんて関係ないのだ。

「ままならないものね」

彼女はため息を吐く。

槇坂先輩は、大人や周りが自分に何を期待しているかに敏感で、彼女もその期待に応えることが自分の役割だと思って『槇坂涼』という優等生を作り上げたような人だ。だから、僕が言わんとしていることもすぐにわかってしまったのだろう。

「そして僕は、大人の前ではいい子でいたいから、そんなことには興味のない振りをするのさ」

「つまり、振りをしているだけで、興味はあるということね。そんなことを言われると、逆に一緒に悪いことをしたくなるわ」

「だけど、今度は一転して苦笑。」

「その気にさせてあげようかしら。藤間くんの視線を釘づけにして、どきどきさせる方法なら知っ

てるわ。練習もしたし」

何のことかと思えば、いつぞやの学校の階段でのことか。そういう男の本能的な部分を突くのはやめてもらいたいものだ。

「あんまり男をからかっていると、痛い目に遭うぞ」

「素敵な台詞。こっちがどきどきするわ」

「……」

言っても無駄か。

「だいたい練習って、そんなことやってて虚しくならないか？」

「それは……ええ、ちよつと、なったわ……」

何か思うところがあつたのか、槇坂先輩は重い口調でそう吐露した。

「ところで、藤間くんは、その、どんな……」

「うん？」

「ごめんなさい。やっぱりいいわ」

ぺしり、と掌で叩くようにして顔を覆ってしまう。

「……」

いったい何なんだろうか。

それきり槇坂先輩が口を閉ざしてしまったこともあり、僕は黙って歩いた。横目で隣を見れば、彼女は落ち込んでいるのか反省しているのか、力なく視線を落としていた。

やがて駅が見えてきたころ、  
「そうだ。いつものカフェに寄っていかない？」  
ようやく口を開いた槇坂先輩は、何かを吹っ切るみたいにして、努めて明るい口調でそう提案してきた。

「今日は遠慮しておくよ」

「そう……」

僕が断ると、彼女は残念そうにぼつりとこぼし、また黙り込んでしまった。

その様子に少しばかり心が痛む。

さつきから断りすぎだろうか。どれもこれもそう簡単には受け入れられないもので、譲る気はないのだが、それならばカフェに寄るくらいはしてもいいのかもしれない。

「……まあ、少しくらいならつき合ってもいいが」

「あら、そう？」

途端、ころりと明るい声を発する槇坂先輩。

「じゃあ、行きましょ。さすが藤間くんね。口で言わなくても、わたしが今いちばんしたいことをわかってくれるわ」

「……」

罨だったか。

どうせ変化に鋭くなるのなら、罨や演技も見抜けるくらいになりたいものだ。

『天使の演習』という名のカフェがある。  
槇坂先輩の家の最寄りの駅から少し歩いたところの、閑静な住宅街の一角に店をかまえている。上品な内装で、とても雰囲気がいいのだが、いつきてもあまり人が入っていないのが心配だ。客として利用する分にはそんなこと気にする必要はないのだろうが、このコーヒ―は気に入っているし、なんだかんだで顔馴染みにもなったので、潰れてしまうのは少々もったいないと思う。そうならないよう、ぜひとも頑張ってもらいたいものだ。  
「いらつしゃいませー」  
ドアベルを鳴らしつつ中に這入ると、迎えてくれたのは弾むような明るい女性の声。それを聞いた僕は、おや、と思った。  
そこにいたのは鮮やかなハニーブラウンの髪をした女性だ。槇坂涼に負けず劣らずの美貌の中に、隠しきれない快活さが見え隠れしている。彼女はまだ十九才で、現役の大学生だ。  
カウンタの向こうに目をやれば、いつ見ても眠そうな顔をしている男性がいた。こちらは二十歳そこそこ。

ふたりはこの店のアルバイトではない。このふたりこそが店長夫婦だ。何でも亡くなった父親からこの店を受け継いだのだとか。

現役女子大生にして人妻であるところの店長夫人は、僕たちを見るなり嬉しそうに、眩しいもの

でも眺めるように微笑んだ。

「今日も仲よく放課後デートですか？」

「ええ、そうなんです」

欠片も否定せず答える榎坂先輩。僕としてはただの寄り道のつもりなのだがな。

「羨ましいなあ。……あ、お好きなのところにどうぞ」

言われ、僕はとりあえず手近なテーブル席に腰を下ろす。ついでに店内を見回してみれば、案の定、カウンタ席に中年の男性客がひとりいるだけ。いつも通り閑散かんさんとしている。

すぐにお冷ひやが運ばれてきた。

「珍しいですね、キリカさんがこんな時間にいるなんて。もともと講義がない日だったかしら？」

問うのは榎坂先輩。キリカさんというのは店長の奥さんのことのようにだ。

僕たちとて顔馴染みになったからと言って毎日きて、彼女——キリカさんのいるいないを完全に把握しているわけではない。榎坂先輩は自分の記憶違いを疑ったのだろう。

「いいえ、たまたま休講になっただけです。いつもは講義の真っ最中です」

「自主休講ですか？」

「違いますよ。もう、失礼ですね」

ついつい茶々を入れてしまった僕に、向かいの榎坂先輩からは唇の動きだけの「バカ」が飛んでくる。

しかし、当のキリカさんは特に気にした様子もなく、かわいらしく怒ってみせただけだった。榎

坂先輩よりもひとつだけとは言え年上のはずなのだが、時折少女のような無邪気さを垣間見せる彼女には、そんな仕草もよく似合っていた。

「いえ、世の中、高校生のくせに自主休講するのがいるもので」

「榎坂さん……」

彼女は、僕の言葉の含むところがわかったのか、榎坂先輩に窘めるたじなような視線と発音を送る。

「だって、藤間くんだったらいつの間にかいなくなってるんですもの」

「ああ。じゃあ、仕方ないですね」

と、納得した様子のキリカさん。……は？

「男の子なんて、目を離すとすぐにどこか行ってしまいますからね。それくらいして、ちゃんと捕まえておかないと」

それは授業よりも優先されるべきものののだろうか。

カウンタの向こうでは店長が苦笑していた。

「君、そろそろ注文をもらってください」

そして、僕の助け舟ではないのだろうか、キリカさんにそう促す。

「あ、はい。……今日は何にします？」

「わたしはブレンドで」

「僕も同じく」

「わかりました。ブレンドふたつですね」

キリカさんはそう復唱して戻っていった。  
まだ六月にもなっていないというのに、すいぶん暑くなってきた。次にきたときはアイスコーヒーを頼むことになるかもしれないな。

注文したブレンドコーヒーはすぐに運ばれてきた。間でたったひとりの客が帰ったことでの会計にキリカさんの手がとられたりしたが、それでも十分に速かった。

「旅行の話だけ——」

客が僕たちだけになった店内で、コーヒーをひと口飲んで喉を潤した槇坂先輩が、そう切り出し始める。

「そういうことがなければ許されるのかしら？」

それは旅行に行きたいがために提示した条件というわけではなく、彼女の頭に浮かんだ素朴な疑問として口にしたようだった。

「問題は大人がそれを信じるか、だろうね」

高校生の男女がふたりだけで旅行に行きますが、健全なものです。心配しないでください、と言って、果たしてそれを大人は信じるだろうか。

「大人って、誰？」

問いを重ねる槇坂先輩。

「大人は大人だろ」

「具体的には？ 先生？ それとも、泊まったホテルのフロント係？」

「……」

確かに。今まで言っておいてあれだが、実際誰を指すのだろうな。

休み中に旅行に行くのにわざわざ先生に事前連絡する義理も義務もない。学生課で学割を申請したとしても、各担任に連絡がいくとも思えない。旅先で関わる大人も、よほど目に余る行動をしないう限りは、保護者はどうしたなどと騒ぎ出すことはないだろう。

「具体的には、僕の母親や槇坂先輩の両親かな？」

「でしよっね」

彼女は僕の回答を読んでいたようにうなづく。

「藤間くんのお母様は、やっぱりそういうことには厳しいの？」

「いや、特には」

逆に特別緩くもないが。

母は世間から後ろ指をさされるような生き方を選んだ人だが、だからと言ってそれに引け目を感じて僕に対して強く言えないわけではない。人一倍自分を厳しく律することを僕に課したりはせず、高校生として最低限の節度だけは守れと言う程度。旅行に関してもそんなところだろう。尤も、その『最低限の節度』の範囲がいまいち不明瞭だ。

「うちも両親がわたしのことを全面的に信用してるから、嘘を言っても疑いもしないでしょうね。藤間くんと清く正しくおつき合いしていて、一緒に楽しく旅行に行くだけって言っても納得すると思うわ。……あら？」

と、不意に何かに気づいたように、槇坂先輩。……僕も気づいた。

「意外と状況は許すわね」

「いや、待て」

何をしれつと恐ろしいことを言っている。

「何かしら？」

彼女は白々しく首を傾げた。

「確かに状況は許すかもしれない」

「ええ、そうね」

そして、うなずく。

どうやら僕たちの周りは、子どもを信用してくれている大人ばかりのようだ。いつか僕と槇坂先輩の間で何かがあっても、それを高校生のくせにと一方的に非難せず、理解すら示してくれるのかもしれない。

そういう点では、よい大人に恵まれた境遇に素直に感謝したい。

「だけど——さっきも言っただろ。僕にそのつもりはない。そこは変わらないよ」

何せ健全な旅行がまっとうされるとは、まったくもって思えない。僕は槇坂涼を決定的に信用していないし、それ以上に自分自身が信じられない。

「残念」

槇坂先輩は唄うように、そう口にする。

口にしただけ。

喰い下がるわけでもなく、怒り出すわけでもなく。多少不貞腐ふてくされているような様子を見せてはいるものの、それだけだ。

諦めたのかどうか疑わしいところだが、僕はふと聞いてみたくなる。

「なんでそんなに一緒に行きたいんだ？」

「そうね——」

と、彼女はどこか遠くを見るような目をし、

「藤間くんが世界に何を見にいきたいのか知りたい。できればそれを一緒に見てみたい。——そう思うの」

そう言ってコーヒーをひと口飲み——そして、カップを置いてから僕に微笑んだ。

その笑みに稚氣ちきや邪氣じきといったものは欠片かけらもなく、槇坂涼に相応しくただただきれいで。

「……そうか」

僕はそう口にするのがやっとだった。カップを口に運び、さり気ないふうを装いつつ視線を外に向け、彼女から目を逸らした。

別にそんなたいそうな志をもって海外旅行に行くわけではないのだが。僕は高校を卒業したらアメリカの大学に進み、そのまま生活基盤も向こうに移すつもりだ。だから、その前にヨーロッパも見ておきたい。せいぜいその程度だ。

そんなのでよければ……。

（バカ、やめろ）

うっかりとんでもないことを考えそうになって、自分で自分を制止した。しおらしいことを言って油断を誘う。それこそが狙いだったらどうする。そう思うと、僕の向かいで榎坂涼が悪魔のような笑みを浮かべていそうで、視線を戻すのが怖かった。内心の恐怖を誤魔化すように、残っていたコーヒーを一気に呷る。

と、そのとき、

「そう言えば、このアルバイトってどうなったのかしら？」

「え？ ああ、そうだな」

僕が恐れていたようなことはなかったらしく、彼女はころっと話題を変えてきた。

「キリカさん。前に表に貼ってあったアルバイト募集って、どうなったんですか？」

店内に僕ら以外の客がないのいいことに、榎坂先輩はカウンタ付近にいたキリカさんに呼びかける。

「あははー。それがなかなか。場所が悪いんですかね？」

返ってきた答えはこれ。

「ふたりとも、よかつたらどうですか？ やってみませんか？ 時給ははずみますよ」

「君、勝手に決めないでください」

「はあい」

またしても店長に怒られるキリカさん。舌を出しつつ、「だそです」。

「でも、実際、君たちみたいな人にきてもらえると、僕としても嬉しいですね」

店長のその言葉に、僕たちは顔を見合わせる。

というか、僕と榎坂先輩でワンセットなんだな。確かに前にそんな話をしたことはあるが。

「どうする？」

「急にそんなことを言われてもね」

じゃあそうします、と簡単に決められる話でもない。

戸惑っていると店長がカウンタの向こうから出てきた。手にはコーヒーマーカーのサーバー。彼はこちらまでくると、空になっていた僕のカップにコーヒーを注いだ。これはサービスだと思っていいのだろうか。

「せっかくですから面接でもしましょうか」

「え？」

僕と榎坂先輩は異口同音に驚きを発音する。

眠そうな顔をして、唐突に何を言い出すのだろうな、この人は。

「ああ、そんなに身構えなくていいですよ。質問はひとつだけですから。……うちで断られたらどうします？」

「……」

断られたらというのは、不採用になったらという意味だろうか。……何だ、その質問は。そもそもこちらからアルバイトをしたいと言いつたわけでもないのに、いきなり不採用になったときの

ことを聞いてどうしようというのだろう。——とは言え、想定できないこともない。一度はそれも面白いかもと考えたのだから。

「まあ、どうもしないかな、僕は」

「わたしも、ですね」

「ほかを探したりはしないんですか？」

店長がさらに問う。

「ないと思いますね」

別に可処分所得を得たくてアルバイト先を探しているわけではないので、ここで断られたら「そうか」と思うだけだ。今のところほかを探す予定はない。向かいでは僕と同じ意見なのか、槇坂先輩がうなずいていた。

「そうですか。……じゃあ、採用です」

あっさりと店長はそう言った。

「せっかく一緒に働いてくれるなら、うちがいいと思ってくれる人がいいですからね。それに動機はときに能力に勝りますよ」

「……」

まあ、一理あるか。店長と同じようなことを言う企業の採用担当も多いらしいし、変わった人だとも言い切れないのかもしれない。

「ああ、因みに、君たちが採用なのは本気ですよ。気が向いたら言ってください。明日からでもい

いし、夏休みの暇なときでもいいです。いつでも歓迎しますよ」

「は、はあ……」

相変わらず眠そうな目のまま笑みを見せる店長。僕は曖昧に返事をするしかできなかった。

「あははー、採用になっちゃいましたね」

そして、横で一連のやり取りを聞いていたキリカさんが苦笑する。

「でも、わたしも大歓迎です。いつか本当にきてくれると嬉しいです。ぜひ一緒にやりましょうね」  
彼女はそう言うと、すでにカウンタへと帰ってしまった店長を追って仕事に戻っていった。

僕たちはまたも顔を見合わせる。

槇坂先輩が目だけで「どうする？」と聞いてきた。

「前向きに考えるさ」

僕は肩をすくめて、そう答えるのだった。さて、うちの学校はアルバイトについてはどうだっただろう。

帰り道、

「海外旅行ってどれくらいお金がかかるのかしら？」

五月下旬の午後六時近く。まだ外は明るかった。ついこの間まで五時を過ぎれば暗くなりはじめていたのに、いつの間にか、というか、いきなり日が長くなったような気がする。

槇坂涼は視線をやや上げ、そのまだ明るい空を見ながらそう口にしたのだった。

「ほう、何か予定でも？」

「ええ、北欧のほうにちよつと」

槇坂先輩はにっこりと笑う。

「よかつたら藤間くんも一緒にどう？」

「けっこうだ」

僕はきっぱりと断る。

やっぱり諦めてなかったか。だろうと思った。

「残念ね。二回行けると思ったのに」

「……」

別々にカウントするのかよ。

「そうやって旅費の心配をしてる時点で、僕についてくるもへつたくれもないだろうに」

「ううん。これは純粋な疑問。お金なら心配ないわ。貯金がけっこうあるもの。……あら、わたしって優良物件。今のうちに押さえておいたら？」

「やめとくよ。昔からうまい話には迂闊に乗らないことにしてるんだ」

物件が優良すぎて、正直こわくて手が出せない。

「あら、ひどい。それじゃわたしが悪い詐欺師みたい」と笑う槇坂先輩。実際、そんなものだろうに。詐欺師じゃなくて、彼女自身が詐欺そのもの。遠くから見ているときは素敵な女だと思ってい

たのに、近くに寄ったらとんだ悪魔だった。何だこの詐欺。

「女の子で痛い目に遭った経験でもあるのかしら」

「過去にはないよ。現在進行形ではあるが」

しかも、僕はその悪くない詐欺に未だつかまっていたままだ。

さて、槇坂先輩のほうには旅費の心配はないらしい。僕もない。さすがに全額自腹を切ったら貯蓄が底をつきかけるが、親に頼めば多少なりとも援助してもらえるだろう。何せ僕の将来にも関係しているのだ。そのための社会勉強という名目は立つ。

そして、お互い親は反対しないだろうという予想も出ている。

槇坂先輩が言うところの、状況は許す、だ。

なら、障害はどこにあるのだろう。

「……」

ああ、僕か。これはハードルが高いな。

なにしろ僕はさほど健全じゃない。いや、特に問題なく成長発達し、当然もつべき異性への興味をもっているのだ、ある意味では健全と言えるかもしれない。

その僕が槇坂先輩とふたりだけで旅行だって？

むりだな。

積極的にその気がある人間と、潜在的にその気をもっている人間がそろっているのだ。間違いが起こらないほうが奇跡だ。

気まぐれに、それこそ前向きに考えてみたけど、やはりいろいろ問題がありすぎる。

## 挿話1 槇坂さん、オウンゴール

わたしが住んでいるところは、いわゆる高級住宅地と呼ばれている場所にある。

北部にそびえる山に向かって緩く傾斜した町で、上へ行けば行くほど偉いといった古くからの風潮もあったりするようだ。実際、この土地に古くから住む最有力名家が、北の端のいちばん高い場所に砦のような邸宅をかまえて、町を見下ろしている。

——これは少し前の話。

その日、わたしが学校から帰ってくると、家にはいつものように誰もいなかった。

父はそれなりに地位のある勤め人であるから当然のこと、母も絵画教室を開くセレブ妻として忙しそうにあちこち飛び回っているのだ。わたしが帰ってきてても、ふたりそろっていないことのほうが多い。子育てに関しては放任主義と言えは聞こえはいいいけど、つまるところわたしがしっかりもので手がかからないのをいいことに、ほったらかしにしているだけだ。尤も、それだからこそ藤間くんが風邪をひいたときにもあつさり外泊ができたわけだけだ。

自室に入り、机のそばに鞆を置く。

制服を脱ごうとして——視界の隅に入った姿見に気づき、その手を止めた。そこに映る自分を改

めて見る。

人目を引く美貌。

日本人にしては恵まれたスタイル。

洗練された立ち居振る舞い。

その上、学校での成績もよく、品行方正で先生からの受けもいい。人当たりもいいから生徒の間でも人気が高い。

笑ってしまうほど完璧だった。

周りから望まれる役割をこなそうと努力しているうちに、気がついたらこうなっていた。——そ

う、ここにいるのは偶像の『槇坂涼』。

そうあることに特段の疑問をもたずにきた。

でも、とわたしは思う。

もしこれが誰かひとりの男の子のためにしてきたことだとしたら？ その彼と出会う前から、彼のことだけを想って自分を磨いてきたのだとしたら？ それはとても素敵な想像だった。

わたしにとってそんな男の子はひとりしかない。藤間くんだ。

彼を虜にしたい。

その視線を釘づけにしたい。

最近、よくそんなことを思う。

「……」

尤も、視線を釘づけにするくらいなら、簡単だといえば簡単だ。なぜならわたしは、一度は彼を支配することに成功しているのだから。……いや、失敗もしたけど。

不意にわたしの中の稚氣が目を覚ます。

改めて自分の全身を姿見に映した。

アンクルソックスと短く詰めたスカートのおかげで、脚は実際よりも幾分か長く見える。その右足を半歩前に出し、軽く爪先立ち。そして、スカートの裾を太ももの上を滑らせるようにして、少しずつ上げていく。やがて足の高い位置まで露出した。普段ならスカートの裏に隠されていて、絶対に見ることのない部分だ。

これくらいだろうか。

これくらいなら藤間くんはわたしより背が高いし、同じ高さの場所に立っている限りはこの前みたいにつかり中まで見せてしまうことはないはず。

なかなか際どく、挑発的な姿だ。これで藤間くんの視線を釘づけにできるだろう。そのとき、彼はいったいどんな顔をするのだろうか。見てはいけないものを見ているという禁忌と、もっと奥を見たいという欲望の間で揺れる表情をするかもしれない。そんな顔をされたら、わたしはしばらくは忘れられないだろう。

ひとまず満足してスカートの裾を直した。

(あとは同じ失敗をしないように、だけど……)

それはそれで効果抜群なのは確かだ。わたしもかなり恥ずかしい思いをするけど。

でも、待つて——と、自分を呼び止める。

そのときに見えたのが彼の好みじゃなかったら？　せつかくの胸のどきどきも一気に冷めてしまふかもしれない。それは困る。

いったいどんなのが好みなのだろう？　ドット？　ボーダー？　あまりそういうのは持っていないのだけど……。

わたしはちらりと洋服ダンスを見た。

(く、黒もあるにはあるけど……)

顔に掌を当てながらそんなことを考える。顔が熱い。

でも、彼はわたしよりひとつ年下で、まだ高校二年生。そこまでオトナだと逆に引かれてしまう可能性もある。

じゃあ、この前と同じ薄いピンク？

あれなら効果があることは実証済みだ。彼の好みはそういう清楚な色なのかもしれない。

(もういつそのこと本人に直接聞いたほうがいいのかしら？)

でも、どんなふうに聞こう？

わたしは腕を組み、左の拳を顎に当てて思案しながら、部屋の中をうろうろと歩きはじめる。

(できるだけさり気なく、「ねえ、藤間くんはどんな女の子がタイプ？　あと、女の子にはどんな下着をつけてほしい？」……)

この上なく不自然だった。何より一問目で自分から大きく外れていた場合、傷が大きすぎる。

「……」

……。

……。

……。

唐突に、わたしはフローリングの床の上に崩れ落ちた。

「な、なんで見せることが前提になってるの……？」

これではただの痴女だ。

それ以前に、さっきからわたしは何をやっているのだろうか？ 急に我に返って、ちょっと死にたくなった……。

### 3

唐突に、母から祖父が死んだと電話があった。

これが母方の祖父ならまだしも、僕の父親に当たる人のほうなのだから、そんな訃報<sup>ふほう</sup>を聞かされたところで何の感慨もない。

『そんなわけで、明日大々的に社葬があるから、真も出席しなさい』

「は？」

祖父の死を聞かされた後、続く母の言葉に耳を疑う。

「なんで僕が？ ていうか、まさか母さんも？」

『仕方ないでしょ。あの人が必ず出席するようにって言うんだから』

母の口調は、突然の法要にもしつかりと都合をつける社会人のそれだった。

それにしても——と、僕は心の中でため息を吐く。実父であり会社の会長である人の葬儀だから盛大にしたい父の気持ちはわからないでもないが、自分の愛人とその子どもまで呼ぶかよ。

僕の父は、家は由緒<sup>ゆいじょ</sup>ある旧家で、本人は一流企業の社長という大物だ。

現在の日本の大企業の中では、戦後の高度経済成長期に一気に世界に名を轟<sup>とどろ</sup>かせるまでになった複合企業<sup>コンプレックス</sup>体、宇佐美グループが有名だ。我が父の企業はそこまでの派手さはないが、その代わりに戦前から連綿と連なる歴史があると言っていいだろう。

そこまではいいのだが、公然と愛人を三人——今はふたり、囲っている。母はそのひとりだ。話の感じからすると、明日の葬儀にはもうひとりもきていることだろう。男としての云々みたいなものを誇示したいのだろうか。

「葬式の会場で修羅場とかないだろうな」

『ないない』

母はあっけらかんとして否定する。

『そんなことになる性格なら、こんな生き方は選んでないわ』

それもそうか。向こうだって、テレビドラマの如く「奥さんと別れて」みたいなことを言ってくる女性を愛人にしたりしないだろう。

母は愛した男と良好な関係を築き、子どもを作り、それを利用してではあるが自分の能力を存分に発揮できる社会的地位を獲得した。ある意味では女としての幸せを満喫しているわけだ。違いがあるとすれば、そこに正妻という立場があるかないかだけ。

母のそういうしたたかさは、僕も見習っている。利用できるものは利用しないと。

「こっちは明日も普通に学校なんだけどな」

『休め休め。どうせ一日休んだくらいじゃびくともしない成績なんでしょうが』

「まあね」

頭の中で時間割りを思い出してみれば、明日は槇坂先輩と同じ授業があった。

『学校の制服でいいわ。……時間には遅れないようにね』

そうして母は言うだけ言って電話を切った。

正直、面倒だ。

だけど、いい機会でもある。一度会っておきたい人物もいることだしな。

「そんな事情なので明日は休む」

母からの電話を切った後、僕はその手で槇坂涼に連絡をとった。

『それはわかったけど、あなたは大丈夫なの？』

「何が？」

槇坂先輩の心配げな声に、ナチュラルに聞き返す。何について心配されているのかわからなかったのだ。

『お爺様が亡くなられたのでしょうか？』

「ああ、そういうことか」

が、ようやく理解。

「僕の家の事情は知ってるだろう？ 父親ともめったに会わないし、その父方の祖父なんて一度も会ったことがないよ。何年も会っていない遠い親戚が死んだくらいの感覚さ」

『そう。それならいいけど。……それにしてもどういう風の吹き回し？ 明日休むくらいで電話してくるなんて。わたしの声を聞きたくなった？ だとしたら嬉しいのだけど』

「……冗談なら笑えるものにしてくれないか」

ストリートな問いかけが逆に不意打ちとなって、ずいぶんとありきたりな応手おうしゅになってしまった。

「この前みたいに心配して押しかけてこられても、僕は家にいないんだ。無駄足を踏ませても悪いと思ってね。世に言う親切心というやつだよ」

『それは助かるわ。でも、理由がないからといって行かないとは限らないのよ？』

「……」

『さっそく今度の週末にでもお邪魔しようかしら。「……きちゃった」とか言って』

それは新手のホラーか何かだろうか。うつかり中に招き入れそうになるな。くすくす笑っている槇坂先輩に僕は言い返す。

「電話は別にあなたにだけってわけじゃないさ。後でこえだにも連絡するつもりだ。あいつも一緒に授業だからね」

『三枝さん？ だったらわたしが——』

しかし、槇坂先輩は言いかけた言葉を吞み込む。

『うん。何でもない』

「なんだ、こえだと会うから伝えてくれるって話じゃないのか？ 僕としてもそうしてくれるほうが楽なんだが」

『そうしようと思ったけど、やっぱりやめておくわ。なんだかずるいことしてる気がするから。あなたから電話してあげなさい』

「まあ、もとよりそのつもりだったけど」

明日会ったときにでも槇坂先輩から伝えてくれるなら伝えてくれるで、それでもいいと思うのが。学校への欠席の連絡じゃあるまいし、人伝で十分だろう。

『そう。明日は藤間くんと会えないのね。残念だわ』

「会ったところでひと言ふた言葉葉を交わすだけのことも多いと思うけどな」

尤も、僕は授業の前後に槇坂涼とその周辺を眺めて楽しませてもらっているが。

『そうね。どうしても周りを気にしてしまつてダメね。もういつそつき合つてるって公言したほう

がいいかしら』

「狼少年ならぬ狼女にでもなるつもりか？ 嘘は感心しないな」

誰と誰がつき合つてるって？

『狼女って月を見たら変身しそう。……月がきれいな夜は気をつけてね。わたし、藤間くんを襲っちゃうかも』

槇坂先輩は楽しそうに笑いながら言う。しかも、その笑いが例の如く大人っぽいものだから、台詞そのものに妙な艶があった。

「そうか。なら僕は銀のナイフを持ち歩くとしよう」

『あら、すいぶん素敵な関係ね。今よりずっと魅力的よ』

「どこがだ」

この上なく殺伐とした関係だ。

そうして槇坂涼との電話を終え、その後こえだにも明日休むけど心配するなと伝えた。すると彼女は「忌引き<sup>きびき</sup>きつて欠席に入らないんでしょ？ 羨ましいなあ」などとぬかしやがった。……まあ、それでこそこえだだと思わなくもないが。

翌日の社葬は大きな葬儀場で派手に行われた。大御所芸能人などが亡くなったときによくニュースで見る場所だが、まさか自分がここにくることになるとは思わなかった。さすが大企業の社葬と

いったところか。贈られた花には例の宇佐美グループの名もあった。

僕と母は近親者席に座るよう指示された。

そこから僕は遺族席を見る。喪主には当然、僕の父にあたる人。それから正妻に、嫡子たる三姉妹。そして、末席に僕の目当ての人物がいた。

名を遠矢一夜というらしい。

スタイリッシュな眼鏡の似合う伶俐な相貌は、ひと言で言ってしまうえば知的美青年といったところか。驚いたことに彼は、遺族席の末席に座りながら、我関せずとばかりに本を読んでいた。なかなか豪胆な神経をしている。

僕が彼に注目する理由、それは彼が僕と同じく庶子であるからだ。

つまり彼の母もまた愛人のうちのひとり。

だが、不幸にも彼はその母親と死別し、今は本家に引き取られているのだという。僕の異母兄。もちろん、半分だけ血がつながっているという点では、本家の三姉妹も同様に僕の異母姉なのだろうが、やはり自分と同じ立場である彼のほうが気になる。

不意に彼が顔を上げた。何かを探るように視線を彷徨させた後——僕を見つけた。こちらの視線に気がついたらしい。どんな反応をするのか興味があり、僕は彼の視線を受けつつ、そのまま見続けてみた。

程なくして、彼は再び本に目を落とした。目を逸らしたわけではなく、ごく自然に。何ごともなかったかのように。どうやら面白くも面白くもなくなかったらしい。ずいぶんと冷めた性格をして

いるようだ。

(なるほど。彼が、ね)

と、目当ての人物を目視で確認したところで、近づいてくる人の気配を感じた。

一組の母娘だった。

母親のほうは和装で、その上品な雰囲気はまるで高級料亭の女将だ。彼女と母が無言で会釈を交わしたことで、僕はようやくその母娘が何ものか理解した。——こちらと同じ、愛人とその子だ。

僕は娘のほうを見る。

こういう場所にはぴったりの喪服の如き黒いセーラー服姿。足は黒のニーソックスに包まれ、短いスカートの裾との間にわずかに肌の部分が覗いている。この手のスタイルにフェティシズムを感じるやつらが見たら歓喜しそうだな。

僕の知る誰かさんを思い出させる長い黒髪で、前髪はきれいに切りそろえられている。その下にある面貌はというと、意外に和風だ。その上、あの遠矢一夜の異母妹だけあって、よく整っている。まるで日本人形のようなだ。

そして、同時に僕にも似ていた。

ただし、何年か前の僕だ。

彼女はこの世のすべてが面白くないかのような、心底つまらなさそうな顔をしていた。何を見ても、ふんと鼻を鳴らしてそっぽを向きそう。事実、僕と目が合ったが、挨拶を口にする素振りもなく席に座った。

切谷依々子。

確かそれが彼女の名前のはず。今日、僕が会ってみたいと思っただけもうひとりの人物だ。

長くも盛大な式典が終わり、葬儀場の前で棺を載せた霊柩車を見送った後、僕は喧騒の中で遠矢一夜に声をかけた。

「すみません。遠矢さんですよね？」

「ん？」

振り返る遠矢さん。彼はさっそうと喉もとに指を突っ込み、ネクタイを緩めていた。よく見れば着ているのは礼服ではなく、ダークブルーのスーツだった。この年で礼服を持っているほうが珍しいのかもしれない。そして、間近で見えて改めてよくわかる。

（こいつはとんでもない美形だな……）

さぞかしモテることだろう。

誰だ、と目で聞いてくる彼に僕は答える。……先ほど視線を交わしたことは、彼にとって取るに足らない出来事だったのか、すっかり忘れているようだ。

「初めまして。僕は藤間真と言います。あなたと同じ出自の人間、と言えわかりますか」

「ああ、なるほどな」

遠矢さんは薄く笑う。少し変わったイントネーションの発音だった。

「遠矢さんは火葬場には行かれませんか？」

遺族席に座っていた面々はいくつかの車やタクシーに別れて火葬場に向かうようだが、彼にその素振りは見えない。

「ええねん。俺みたいなんがそんなとこまで行っても、ええ顔する人間は少ないしな」

発せられたのは端整な顔には似合わない関西弁。そうか。確か彼は関西のほうから引き取られたのだったな。

「そうですか。じゃあ、よかったら時間をいただけますか？」

「なんか用か？」

「いい機会ですから少し話をしたいと思ひまして」

ふうん、と彼。

「ま、ええか。……ここじゃあれやから場所変えよか」

「その前に彼女も連れて行こうと思っています」

僕が視線で示したのは切谷依々子だ。

彼女は、大人同士で挨拶やら立ち話やらを交わしている母親をよそに、つまらなさそうに辺りに目を向けていた。きっと彼女の目にはこの式典もくだらないイベントに映っていることだろう。

「もしかしてあれもか？」

「そういうことです。……ちよっと声をかけてきます」

遠矢さんが「いやな面子やな」とつぶやくの聞きながら、僕は切谷さんに近づく。

「切谷さん？」

不意に自分の名前を呼ばれて振り返った彼女は、じっと僕の顔を見つめてくる。見知らぬ人間と面と向かっているにも拘わらず、彼女の表情はいささかも変わらない。僕は日本人形のように感じた第一印象を、よりいっそう強くした。

「……誰？」

「君と同じ愉快な身の上の人間さ」

僕がそう答えると、切谷さんは感情の乏しい発音で「ああ」と納得した。

「……で？」

「よかつたら少し話をしないか？」

一瞬「何で？」といった顔をしたが、でも、すぐに考え直したらしい。

「ま、このまま真っ直ぐ家に帰るよりは面白いかもね」

「そういうこと。毎日がつまらないなら、自分で面白くすればいいわけだ」

「……」

何か——それも文句か罵声ばせいの類を、言いたげに視線を向けてくる切谷さん。

どうやら当たりか。まったく、昔の僕かよ。美沙みさ希先輩に会わせたくないな。散々引つ掻き回された後、気がついたときには人生観が変わっていることだろう。

「因ちなみに、あの人も一緒だ」

僕は彼女の視線を、離れたところにいる遠矢さんに向けさせる。

「女ひとりに男がふたり。……ああ、どこかに連れ込む気ね」  
 「安心してくれ。犯罪と倫理的禁忌を同時に犯すつもりはない」  
 僕という人間はそんなふうに見えるのだろうか。少しショックだ。あと、そんな想像をしているわりには声に緊張感がないのはどういうことだろう。  
 切谷さんは一度母親のところに行き、ふた言三言、言葉を交わしてから戻ってきた。  
 「これでそろいましたね」  
 そして僕は、彼女を連れ、待っていた遠矢さんのところに戻る。  
 「そろたらあかん顔ぶれにも見えるけどな」  
 「……ひどいメンバー」  
 「……」  
 異母兄妹の初顔合わせはどうにも不評のようだ。これではセッティングした僕の立場がない。同じ境遇の人間に興味があったのは僕だけだったのだろうか。  
 「まあええわ。どこか落ち着いて話せるとこ行こか」  
 「だったら私、行きたいところあるんだけど」  
 かと言って、嫌々行くわけではないらしい。  
 とりあえず切谷さんがいいところを知っているようだ。こういうとき女の子は頼りになるな。

遺族が火葬場に行くために呼んでいたタクシーの一台を横取りして、少し離れた駅へと移動した。そこからは徒歩。切谷さんの先導で辿り着いたのは――、

「ハイ、おまちっ」

威勢のいい声とともにテーブルの上にどんぶりが並べられる。

――ラーメン屋だった。

店に入ったときからわかつていたことだが、出てきたラーメンを見て僕は改めて向かいに座る遠矢さんと顔を見合わせた。

「なに、おにーさんたち、おシャレなカフェとかでカッコよくお茶したかった？」

隣の切谷さんは鼻で笑うようにそう言うと、手を合わせて「いただきます」を口にしてから軽にお辞儀をした。こちらに向けられる態度は人を小馬鹿にしたようなものだが、その仕種は意外にかわいらしかった。しっかりと躡けられているようだ。

「別にそういうわけじゃないけどね」

ただ単に女の子の案内でラーメン屋に入るという行動にちぐはぐなものを感ただけだ。

「だって、お腹すいたし」

切谷さんはこちらの違和感をよそに、しれっとそう発音した。

そのあたりは僕も同じだ。十一時に葬儀がはじまり、長い式典を経て棺を見送ったのが午後二時過ぎ。今はもう三時前だ。火葬場に行った遺族には遺体を火葬している間に遅い昼食が振舞われるようだが、無論、僕たちにはそんなものはない。

さっそく食べはじめた切谷さんの後を追うようにして、僕もラーメンに口をつける。

なかなか美味しい。女の子はこういう店にも精通しているものなのだろうか。だとしたら、あの槇坂涼も？ 彼女にはお気に入りのカフェをおしえてもらったが、いつかラーメン屋につれていかれることもあるかもしれない。

想像するに、その違和感は今の比ではないな。

「食べながら笑ってる。おにーさん、キモい」

「ほっといてくれ」

僕は顔を引き締める。

昼食抜きもさつきまでは特に気にしていなかったのだが、それを意識した途端、急に空腹を強く感じるようになっていた。それはほかのふたりも同じだったようで、三人ともしばらくは黙々とラーメンを食べた。

どんぶりの中身が半分以下に減って、胃も満たされてきたころ、僕は世間話がそれぞれから話を聞いた。

遠矢さんは現在大学一年生。文学部に在籍しているらしい。

「今は本家のほうにいるんですね」

「まあな」

答えながら彼はやや複雑な表情を見せた。近似値を探すとすれば自嘲、だろうか。

「母親が死んで行き場所がなかったからな」

こちらは特にこともなげにさらりと言つてのける。その経緯は僕もすでに予備知識として知っていた。

「その、どうなんですか？ そっちの暮らしは」

「別に。居心地悪くて、そんなにええもんでもないよ」

まあ、敵も味方も半々つてとこか——何かを思い出したように、そうつけ加える。

「父とは？」

「あの人も忙しい身やからな。同じ家におつても、あんま顔合わせへんわ」

そこで一拍。

彼には関西人にありがちな多弁や饒舌といった印象はなく、要点だけを淡々と話す。

「どちらかというと、死んだじい様のほうに面白いがられたな。あつちは女ばかり三人やから、突然出てきた男の孫が嬉しかったんやろな。いろんなことおしえてもろたわ。道場で投げ飛ばされたり、山に登つてサバイバルまがいのこととかやらされたなあ。そういや、猟銃も撃たせてくれたわ」

「猟銃？ ……面白い？」

反応したのは切谷さんだ。今までつまらなさそうに聞いていたのに、そんな非日常的なアイテムには興味をもったようだ。

僕も遠矢さんも、彼女を無視した。

「ああ、悪い。ちよつと無神経やったか」

「いえ、かまいませんよ」

遠矢さんはきつと、本家に引き取られた自分だけがいい思いをしているように見えたかもしれないと危惧したのだろう。

「こつちも不自由はしてませんから」

少なくとも物質的な面で苦労したことはない。それはきつと切谷さんも同じだろう。家族形態の異質さを割り切つてしまえば、人より恵まれた家庭だと言える。

話を戻す。

「だったら、やつぱり今日の火葬には立ち会つたほうがよかったのでは？」

「別にええよ。故人を悼むのに形式に拘ることないわ。人それぞれや。俺はさしあたり、大学を卒業してあの家を出るまでに、じい様の書斎の本を読破しよう思うてる」

なるほど。それが彼なりのやり方か。

「ま、本当はただ単に面倒な葬式にこれ以上つき合いたなかつただけやけどな」

と、最後にわざわざ自分でオチをつけたが、たぶんこれは偽悪的な翰晦だろう。

さて、一方の切谷依々子。

彼女は高校一年生。お嬢様学校で有名な女子高に通っているという。言ったのはそれだけで、それ以上は語りたがらなかった。

家庭のことには特に。

たぶん、そこに何かがあるのだろうか。

「悪いけど、俺は先に帰らせてもらうわ」  
 ラーメン屋を出て、駅が見えてきた辺りで遠矢さんがそう言った。道々その話をしながらここまでできたので、唐突な発言というわけではない。

「また何かあったら連絡し」  
 「わかりました」

彼とのパイプができたのは、今日の成果のひとつだ。

「それと、後のことは頼んだ。俺にはそういう役は向かんからな」

彼は少し離れて後ろを歩く切谷さんに意識を向けながら、僕にそう告げた。これはただ単に彼女を送り届けろといった類の話だけではないのだろう。彼もまた彼女の様子は気になっていて、その上で話の聞き役を僕に振ったのだ。僕とてそんなに向いているほうではないのだがな。

改札口の向こうに消えていく遠矢さんを見送った後、僕は切谷さんに向き直った。

「さて、送っていくよ」

「……」

試しにそう言ってみるが、無言。

「じゃあ、コーヒーの美味しい店を知っているんだけど、よかつたら行ってみるか？」

「……別にいいけど」

そして今度は、行ってもいい、みたいな態度。

「……」

行きたいのかまだ帰りたくないのか知らないが、それならそれで素直にそう言ってほしいものだ。  
 ひどい天邪鬼だな。

こんなふうにはひねくれたくはないものだ。

## 立ち読みサンプル はここまで

僕が知っているコーヒーの美味しい店は一軒しかない。  
 即ち『天使の演習』だ。

ドアを押し開けると、真鍮しんちゅうのドアベルが心地よい音を響かせた。

このドアベルは本当にいい音がする。店長が言うには、お客さんが最初に耳にする音だから、少しばかりお金をかけたのだそう。意味のないこだわりも好きだが、こういう意味のあるこだわりには素直に感心する。

「いらっしやいませ」

出迎えてくれたのは、明るく弾んだような女性の声。そうか。今日は店長の奥さん——キリカさんのいる曜日だったか。

「あら」

まずはそれなりに顔馴染みになった僕を見て、小さく驚きの声。

「あら？」